「母と子」
～R.S.トマス：詩の翻訳とコメント～

佐野　博美

"Mother and Son" and Other Poems
—Japanese Translations of 3 Poems by R.S. Thomas, "Farm Wife", "Mother and Son" and "Degas: Woman Combing"

Hiromi Sano

R.S.トマスに華やかな恋愛詩を期待することは出来ない。しかしそれなりに、女性や恋愛、結婚生活を描いた詩は散見できる。その描く女性像は、ありふれたようだが、時に聖なるヴィジョンをもたらす者であり、男を受容し甘やかす聖母であり、また時に邪な誘惑者でもある。多くの子どもにとって、神の庇護のもとに置かれたエデンの園たる家庭は、トマスの場合、船員の父親は不在がちで、母親が独裁者として君臨している世界だった。ちょうど、D.H.ロレンスの『息子と恋人』(*Sons and Lovers*)に同一の構図を見ることが出来る。男の子にとって母親は、最初の親密な異性であり、母親にとって息子は、若く魅力的な異性である。父親不在の家庭で、ひとり息子としてひたすら気難しい母親と向きあう日常。成長した子どもは、母鳥からの巣立ちを切望する。大学に入学したトマスも、窒息しそうな現状から逃亡すべく、親もとを離れていく。彼は自ら、次のように語っている。

> .....because my mother was of a domineering nature I was ruled mainly by her. And being an only child I was the center of her attention for good and ill. Consequently, going to university was something of an escape. (Ned Thomas and John Barnie, "Probings - An Interview with R.S. Thomas, *Miraculous Simplicity*, 22-23.)

> ・・・母は独裁者だったので、私に対する彼女の支配力はなまなかではなかった。また、一人っ子であったことから、よかれあしかれ私は彼女の関心の的であった。それ故、大学進学は一種の逃亡であったと言える。

この母親の存在の大きさが、トマスの女性に対するイメージに苦い影を投げかけていることは、想像に難くないが、以下に紹介する詩に見るように、通俗的な美醜の基準からは外れた、ふくよかな女性を理想とするのも、母親によって満たされなかった憧れのイメージ化とも思える。

R.S.トマスの聖母マリアはたくましく太っているのだ。

FARM WIFE

Hers is the clean apron, good for fire
Or lamp to embroider, as we talk slowly
In the long kitchen, while the white dough
Turns to pastry in the great oven,
Sweetly and surely as hay making
In a June meadow ; hers are the hands,
Humble with milking, but still now
In her wide lap as though they heard
A quiet music, hers being the voice
That coaxes time back to the shadows
In the room's corners. O, hers is all
this strong body, the safe island
Where men may come, sons and lovers,
Daring the cold seas of her eyes.

農　婦

その人のエプロンは白い　刺繍する

炉の火にランプによく映える　ふたりがゆっくり語らう

この細長い台所（キッチン）で、白い練り粉は

でっかい天火の中、かぐわしくまた確実に

焼き上がるのだ　まるで六月の草地が

干し草を作るみたいに　その人の手は

慎ましく乳を搾る手　けれども今

その手は沈黙の音楽を聴くかのように

大きな膝に休らっている　その人の声を聞けば

時間（とき）さえも大人しく

暗い部屋の片隅にひき下がるのだ　ああ、その人は

この逞しい体軀そのもの　安息の島

男達はここに来て、息子と恋人の二役で

その人の眼の冷たい海をじっと見詰める

MOTHER AND SON

At nine o'clock in the morning

My son said to me :

Mother, he said, from the wet streets

The clouds are removed and the sun walks

Without shoes on the warm pavements.

There are girls biddable at the corners

With teeth cleaner than your white plates ;

The sharp clatter of your dishes

Is less pleasant to me than their laughter.

The day is building ; before its bright walls

Fall in dust, let me go

Beyond the front garden without you

To find glasses unstained by tears,

To find mirrors that do not reproach

My smooth face ; to hear above the town's

Din life roaring in the veins.

母と子

朝の九時のこと

息子は私にこう言った

母さん、雨に濡れた街路から

雲は去り、太陽が裸足のまま

舗道の温もりを歩いているよ

街の角では、心優しい乙女らが

母さんの白い皿よりも綺麗な歯で笑っている

その笑う声は、母さんの食器が潔癖に触れあう音よりも

楽しげに僕を誘う

昼は今、建築の真っ最中　その光の壁が

たおれて土に帰る前に、僕を行かせて

母さんの手を離れて、庭の外の世界へと

涙の汚点（しみ）のない鏡を探すために

無垢な若さを咎めない

僕の鏡をみつけるために　血の中で立ち騒ぐ

街の喧噪を、この耳でたしかめるために

DEGAS : WOMAN COMBING

So the hair, too,
can be played?

She lets it down
and combs a sonata

from it : brown cello
of hair, with the arm

bowing. Painter,
who with your quick

brush, gave us this silent
music, there is nothing

that you left out.
The blues and greens,

the abandoned snowfall
of her shift, the light

on her soft flesh tell us
from what score she performs.

ドガ　～髪を櫛(くしけず)る女～

髪もまた
　こうして奏(ひ)けるものか

その髪をほどいて
　女が梳る

ソナタ　毛髪の
　褐色のチェロと弓をひく

腕　画家よ
　君が自在の筆で

活写した、この沈黙の
　楽曲　完璧な

君の描画
　青に、また緑に

女の指から奔放に迸る
　旋律の雪が

その柔膚の光が
　女の奏(ひ)く曲をおしえている

☆ Farm Wife

まさに「農家の聖母」のスケッチという趣の詩だ。ウェールズの農家をしっかりと守る働き者の主婦。大きな膝、がっしりした体軀。慣れた手つきで彼女が焼く菓子は、天火の中でゆっくりと焼き上がり、甘いかおりを放つ。そのように、彼女は成熟の時を司どる女神のようでもある。その存在は、彼女を生み出したウェールズの大地にしっかりと根付いていて、神秘的でさえあるのだ。この女のイメージ、存在感は、"Degas : Woman Combing"にも同様に見ることができる。

いのちの静寂を語る彼女の声は、威厳に満ちていて、何ものにも容赦のないこの世の「時」さえ敬意を払う。('the voice/That coaxes time back to the shadows/In the room's corners') 時間に忙殺され、成熟を忘れたこの世界で、彼女の周辺だけは、大地の「時」、太古のままの成熟と安息の「時」が流れているのだ。

彼女は男たちの安息の島('the safe island')だ。しかし、それだけではない。彼女は、無意識のうちにも男たちを誘惑する、危険な存在でもあるのだ。それでも彼女の眼は冷たく澄んで('the cold seas of her eyes')、彼らの愛着には無関心にも見える。母であり、恋人でもある彼女の存在。男たちは、息子として恋人として('sons and lovers')彼女をしたう。'sons and lovers' にはもちろん、D.H. ロレンスのエコーがある。母(Maria)でもあり、妻(Eve)でもあり、危険な誘惑者(the Serpent)でもあるひとりの女の存在。彼女の内部で、二元論的対立と葛藤は解消され、精神と肉体、文明と自然、時間と非時間は和解し、融合し、完璧な宇宙を形成する。しかしこれは、現実ではない。ロレンスも描くように、母も子も、男も女も、この宇宙の対立と矛盾の修羅場で足掻き続けているのだから。

☆ Mother and son

母親の庇護、支配から巣立とうとする息子の言い分が描かれている。これを作者自身とその母親の関係に読み替えることは容易だ。

母親にとって息子は、子どもであると同時に、恋人でもある。息子はこの愛情に取り込まれ、それに応えたいと望む一方、成長の後は、母親から独立した自らの世界を求める。そしてここに、母と子の修羅場が生まれる。わが身にも等しい子どもが今、自分を捨てようとしている。母はその気配を敏感に知り、息子の不実をチクチクと責めるだろう。息子は、母のあり余る愛情と彼自身の愛着ゆえに、裏切りの罪に悩み、自分自身を醜く卑小な存在と感じつつも、自らの世界に、ひとりの男として新しく生まれたいという願望は、圧倒的な力で彼をつかむ。

..... let me go
Beyond the front garden without you
To find glasses unstained by tears,
To find mirrors that do not reproach

My smooth face ; to hear above the town's
Din life roaring in the veins.

ところで、この詩には同時に、聖書の一節を思わせる言葉が散りばめられてもいるのだ。たとえば第1行めの 'At nine o'clock in the morning' は、マルコの福音書によれば、イエスが十字架につけられた時間である。また12行めの、息子を世間から隔絶している 'the front garden' には、エデンの園のニュアンスを読み取ることが出来る。息子は神としての母に守られた楽園を捨てて、楽しげな少女たちが誘う外界へと飛び出して行く。これはアダムの堕落の始まりであり、冒頭の一行に示されるように、死への旅立ちでもある。(さらに考察すれば、キリストのこの死は、次の復活のために、必要不可欠なワンステップだとも言える。ひとりの人間の深層で、子どもは一度死に、蝶が羽化するように、独立した新しい人格が生まれる。) 不自由な神の掟を去り、気楽な少女たち (誘惑者) へと向かう少年アダム。しかしこの黄金の街の誘惑は、やがて灰色の死の街の正体を現すのだ。

少女らの白い歯と、母親がせっせと磨き上げた食器 ('your white plates')、少女たちの屈託のない笑い声と、母親の愛着がこもる食器のカタカタ鳴る音 ('The sharp clatter of your dishes') の対比も面白い。

☆ Degas : Woman Combing

トマスの妻は画家である。彼はその影響で、絵画に関心を示し、絵画がテーマの詩をいくつか書いている。しかしトマス自身も認めるところによれば、彼は本来、音楽好きなのだ。この詩は、一枚の絵に想像の音楽を聞くという内容だが、絵画と音楽のこうした融合に、トマスの妻に対する愛情を読み取るような思いがする。

この作品は、ドガの「髪を梳る女」にインスピレーションを得て書かれたもののようだ。実際の絵の中でドガの描く裸婦は、片方の手で豊かな髪をつかみ、もう一方の手に握った櫛だかブラシだかを、その髪にあてている。トマスの詩からロマンティクな印象を持った者には、この裸婦のむきだしの逞しい背中に幻滅を感じないでもない。しかしこの静止した画面が、詩人の手にかかれば、たちまち生き生きと動き始め、女の髪とブラシのこすれあう様は、情熱的な楽曲に変わる。また、この詩全体が、言葉の音とリズムを巧みに駆使して表現された楽譜、彼の想像の音楽の楽譜と読むことができる。

トマスは「沈黙の音楽」という言葉を好む。'this silent music' ("Degas : Woman Combing"), 'A quiet music' ("Farm Wife") というように。沈黙 (あるいは静寂) の音楽は、当然キーツを連想させる。人間の耳には聞こえない、心だけが聞くことのできる音楽。それは、いのちの歌、宇宙の息吹きそのものかもしれない。"Degas : Woman Combing" は、この静寂と激情が共存する、不思議な作品である。

[使用テキスト]

(1) R.S. Thomas, *Poems of R.S. Thomas*, The University of Arkansas Press (Fayetteville), 1985.

(2) William V. Davis(ed.), *Miraculous Simplicity*, The University of Arkansas Press(Fayetteville), 1993.